松下・三島 (2022). 容装心理学研究, 1(1), 29-38.

イレズミのどのような因子が抵抗感に結びつくか
—日本人の態度に関する調査—

松下戦具・三島爽香 大阪樟蔭女子大学

What factors of tattooing are linked to hesitation?
Research on the attitudes of Japanese people

Soyogu MATSUSHITA and Sayaka MISHIMA (Osaka Shoin Women's University)

Even in countries where tattoos are becoming more popular, hesitation toward accepting tattooing of not only oneself but others still exists. This is true for Japan, as various negative opinions about tattooing prevail among Japanese people. However, it is still unclear what kind of opinions tend to be linked to these feelings. This study performed a factor analysis on negative opinions about tattooing and obtained three factors: aversion to people, social disadvantage, and risk. Next, we performed a multiple regression analysis of the magnitude of the hesitation as a function of the three factors. The results showed that the social disadvantage factor was significant when respondents assumed they would be getting a tattoo and the aversion to people factor was important when they assumed others would be getting one. These findings suggest that factors those are linked to the hesitation toward tattooing of self and others specifically vary.

Keywords: tattoo, hesitation, aversion, disadvantage, risk

近年いくつかの国では，イレズミ [2] を入れる者が若者を中心に増えているという。2019 年にリサーチ会社の Ipsos が行った調査では, 29%のアメリカ人がイレズミをしており, 18 歳から 35 歳に限れば35%がイレズミをしていると推計されている(Jackson, 2019)。これは 2012 年に行われた調査で21%であったことを考えると大きな伸びである(Jackson, 2019)。イレズミは大学生の間でも人気で(例えば Foltz, 2014; Hill, Ogletree, & McCrary, 2016; Owen, Armstrong, Koch, & Roberts, 2013)，約半数の学生は，将来仕事をするうえでそれが悪影響する可能性を感じながらもなお，今後イレズミを入れることを検討しているという(Foltz, 2014)。人々がイレズミを入れる理由はさまざまであるが(Ball & Elsner, 2019; Eriksson, Christiansen, Holmgren, Engström, & Salzmann-Erikson, 2014; Foltz, 2014; Hiramoto, 2014), かつてはそれが逸脱行動とみなされていた文化圏においても今やイレズミは特別なこととみなされなくなりつつあるという傾向が世界中で観察されている(Atli, Akkaya, & Şad, 2021; Swami et al., 2016)。

しかしその一方で，依然としてイレズミは否定的な目で見られることも多い。例えば，仕事の採用場面において，イレズミをしている者はイレズミをしていない者に比べ否定的に見られ(Timming, 2014)，実際に雇用される機会が少ないと言われている(Tews, Stafford, & Kudler, 2020; Timming, Nickson, Re, & Perrett, 2017)。また，たとえ採用されたとしても，イレズミを持つ者は待遇の面で差をつけられたり(Tews & Stafford, 2020; しかし， French, Mortensen, & Timming, 2018), 管理職には適さないとみなされたりする傾向がある(Henle, Shore, Murphy, & Marshall, 2022)。さらに，イレズミを入れている女性は性に関して開放的だと認知される傾向があり(Guéguen, 2013a; Skoda, Oswald, Brown, Hesse, & Pedersen, 2020)，男性から性的な目を向

1 草稿の段階で有用なご意見を下さった小林勇輝先生に謝意を申し上げます。
Corresponding author at: Soyogu MATSUSHITA, Faculty of Liberal Arts, Osaka Shoin Women's University, Osaka, Japan.
E-mail: matsushita.soyogu[at]osaka-shoin.ac.jp

けられたりセクシャル・ハラスメントを受けたりしがちであると示す研究もある(Tews, Stafford, & Jolly, 2020)。こういったイレズミへの否定的な考えは，必ずしも顕在しているとは限らず，無意識的なレベルにまで影響している場合もある(Zestcott, Tompkins, Williams, Livesay, & Chan, 2017)。

日本においてもイレズミは否定的にとらえられがちである (e.g., 藤岡, 2017; 関東弁護士連合会, 2014; 岡林・工藤・熊谷, 2016; 鈴木・大久保, 2018)。関東弁護士連合会 (2014)の調査では，公務員がイレズミを入れることに対して，69.8%の回答者は「許せない」か「絶対に許せない」と答えた。また，大学生を対象に行われた岡林他(2016)の研究においては，将来イレズミが増加すると考えている者たちですらイレズミに否定的な意見を持っていた(原文では「タトゥー」と表記)。鈴木・大久保 (2018) によれば，イレズミに寛容な者ですら，イレズミが社会に受け入れられていないということは承知しているという。

さらに，現在のほとんどの日本人は自分にイレズミを入れるつもりもない。関東弁護士連合会(2014)の調査では，イレズミを入れていると回答した者は全体の 1.6%であった。また, 鈴木・大久保(2018)の回答者のうちイレズミ人口は 2.3%であった。さらに彼らがイレズミへの興味を非経験者に問うたところ，「全く入れたいとは思わない」または「入れたいとは思わない」と回答した者が約 97.7%を占め,「入れたいと思う」や「とても入れたいと思う」と回答した者は約 2.3%に過ぎなかった。これらの値は，アメリカのイレズミ経験者数の十分の一あるいは数十分の一という人数である。

単なる賛成反対の立場だけではなく，日本人がイレズミに対して具体的にどのような印象や意見を持っているのかについてもこれまでの研究で議論されてきた。例えば関東弁護士連合会(2014)は回答者に対し，イレズミを入れた人を実際に見たときの印象として，「強そう」「個性的（格好良い・お洒落）」「怖い」「不快」等の 6 つの選択肢から一つを回答させた。その結果, 最も多く選択されたものは「不快」(51.1%), 次いで「怖い」(36.6%)であった。また岡林他(2016)は回答者に対し，イレズミのイメージとして,「魅力的である」「あこがれを持っている」「不利になることがあると思う」「一般的には好ましくないものと思われている」等の 10 項目を挙げ，それらに対する同意度を回答させ因子分析を行った。その結果,「魅力的である」に代表されるポジティブ印象の因子と，「不利になることがあると思う」に代表されるネガティブ印象因子を抽出している。藤岡(2017)は回答者に対し，日本人や非日本人がイレズミを持っていることへの印象として,「かっこいい」「怖い」「不快である」「宗教や文化的理由」「反社会的組織の人」等の 7 つの選択肢から回答させた（原文では「入れ墨（タトゥー)」と表記)。その結果，日本人のイレズミに関しては「不快である」「怖い」などが，また日本人以外の人のイレズミに関しては「特に何も思わない」「宗教や文化的理由」などの意見が多く選択された。このように，いくつかの先行研究ではイレズミへの抵抗感や許容の度合いだけでなく，抵抗感を生じさせる理由の推定が試みられてきた。

しかし，ほとんどの先行研究では，イレズミに対する意見として設定された質問項目や選択肢の数は限られており，しかもそれらの項目がどのような手続きで設定されたのかも不透明である。例えば，印象を表す項目を比較的多く設定した岡林他(2016)においても，肯定的意見と否定的意見合わせて 10 項目程度であった。さらに, 関東弁護士連合会(2014)や藤岡(2017)では,「その他」なども含めて 6 項目と 7 項目であった。もちろん，一定数の回答者がそれらに同意したということは，イレズミに対する印象として間違っていないのは確かであろう。しかし, それらの項目がどのように選出されたのかが明らかでないため，その限られた項目でイレズミに対する人々の意見のうちどの程度の範囲をカバーできているのかは明らかではない。イレズミをめぐる実際の否定的意見は様々であるが，それらがどのような心理的因子によって構成されているのか，それを計量的に整理した研究は今のところ見られないようである。

さらに，自分がイレズミを入れることに抵抗を感じる理由と，他者がイレズミを入れることに抵抗を感じる理由を比較した研究もほとんど見当たらない。多くの日本人は自分がイレズミを入れることにも他者がイレズミを入れることにも否定的であるが，その理由がどの程度共通しているのかがはっきりしてい

ないのである。例えば，イレズミは一度入れると容易には消せず後悔につながりうるというデメリットがあり(Atik & Yıldırım, 2014)，そういったデメリットはおそらく自分がイレズミを入れるときには抵抗につながるであろう。しかし友人や見知らぬ他人が入れようとしている場合に，「消せずに後悔するからやめればいいのに」という意見がどの程度抵抗感に結びつくのかは依然不明である。自分のイレズミに否定的な理由と他者のイレズミに否定的な理由を切り分けて正確に把握することは，他者のイレズミへの偏見の生起要因を考えるような場面でも必要になるであろう。

本研究の第一の目的は，イレズミに対する否定的意見がどのような心理的因子で構成されているのかを明らかにすることである。そのためにまず，イレズミに対する否定的意見をインターネット上から網羅的に収集する。その後，それらの意見に対する人々の同意度を測定し，探索的因子分析をする。本研究の第二の目的は，どのような否定的因子が自他のイレズミに対する抵抗感に結びついているかを明らかにすることである。そのためにまず自分，友人，見知らぬ他人がイレズミ入れることに対する抵抗感の強さを測定する。その後，抵抗感の強さを目的変数，先に抽出された否定的因子の得点を説明変数とした重回帰分析を行う。それにより，どのような心理的な因子が抵抗感につながっているかを推定する。これらの目的に加え，本研究ではイレズミに関する基本的な統計として，抵抗感の世代ごとの算出と，イレズミ人口(回答者本人及び友人)の集計を行う。これらのデータは，本研究と他の研究のサンプルの等質性を判断するうえで参考になるであろう。昨今の海外においてイレズミのとらえられ方が大きく変わってきていることを考慮すれば(Jackson, 2019)，本邦においても調査時点でのこれらの動態は明確にされるべきであろう。

方　法

回答者

回答者は，日本全国から募集された男性 100 名と女性 100 名の計 200 名であった。男性の平均年齢は 40.0 歳(SD = 10.7)，女性の平均年齢は 39.1 歳(SD = 10.6)であった。ただし，20 代，30 代，40 代，50 代の各年代で男女それぞれ 25 名ずつになるように募集された。彼らは調査会社(楽天インサイト株式会社)の回答者プールから集められた。彼らには参加への対価として，調査会社を通じ，楽天グループ株式会社が発行する「楽天ポイント」が支払われた。

質問項目

否定的意見　質問紙の第 1 のパートは，イレズミに対する否定的意見 20 項目(表 1)で構成された(例「イレズミは人を遠ざけるためのものだと思う」「プールなど肌を露出する所へ行きづらくなると思う」「思い通りの仕上がりにならなさそうだと思う」など)。このパートの教示は「以下に，イレズミ(タトゥー含む)に関する意見が書かれています。それぞれの意見があなたの意見にどの程度当てはまるか回答してください」であった。選択肢は「全くそう思わない」「そう思わない」「どちらとも言えない」「そう思う」「非常にそう思う」であった。これらの回答においては，イレズミを入れる人物の想定に関する教示は無かった。

質問項目である 20 の否定的意見は次の手順で設定された。まず，著者が検索サイトの Google において「イレズミ　反対」「イレズミ 良くない」などのキーワードでページ検索し(「刺青」「タトゥー」などの語も併用)，ヒットしたうち上位の約 200 ページに書かれている否定的な意見すべてを収集した。次に，それらの多くは意味的に重複していたため，著者二名が合議を行い，言語表現の調整をしながら 20 項目に整理した。

人物ごとの抵抗感　質問紙の第 2 のパートは，イレズミを入れる事への抵抗感の強さを測る質問群で構成された。抵抗の強さはイレズミを入れる人物ごとに分けて問われた。このパートの教示は，「以下に、イレズミ(タトゥー含む)への抵抗感に関する質問項目が書かれています。あなたの意見を回答してください。(なお，友人に関する質問は「いるとしたら」と仮定して回答してください。)」であった。各質問項目は，「あなたの日本人の友人がイレズミを入れることにどれくらい抵抗を感じますか」「あなたの外国人の友人がイレズミを入れることにどれくらい抵抗を感じますか」「あなたのよく知らない日本人がイレズミを入れることにどれくらい抵抗を感じますか」「あなたのよく知ら

ない外国人がイレズミを入れることにどれくらい抵抗を感じますか」「あなた自身がイレズミを入れることにどれくらい抵抗を感じますか」であった。選択肢は「全く感じない」「感じない」「やや感じない」「どちらとも言えない」「やや感じる」「感じる」「非常に感じる」であった。

イレズミや友人の有無　第 3 のパートは, イレズミや友人の有無を問う実態調査であった。質問項目は,「あなたは外国人の友人がいますか」「あなたはイレズミを入れていますか」「あなたの知人でイレズミを入れている人はいますか」の 3 問であった。なお，回答者の性別及び年齢は調査会社の登録情報から入手された。

手続き

始めに調査会社は事前登録された回答者プールの成員のうち，年齢及び性別が本研究の条件に合う者に調査の協力を通知した。この通知にはイレズミに関する表記はなかった。通知を受け取り参加の意思のある者から順に，スマートフォンや PC 等で回答 Web ページにアクセスした。回答ページの 1 ページ目には参加における注意事項などが書かれており「同意し，アンケートを開始」ボタンを押すことで回答が開始された。回答は各自のペースで行われ，完遂された場合のデータのみが収集された。各年代及び性別の予定者数(各 25 名)に達した時点でその区分でのデータ収集は停止された。この調査は大阪樟蔭女子大学研究倫理委員会の承認のもと，2019 年に行われた。

結　果

結果の分析にあたり，否定的意見への回答の「全くそう思わない」から「非常にそう思う」には 1 点から 5 点が付与され，人物ごとの抵抗感への回答の「全く感じない」から「非常に感じる」には 1 点から 7 点が付与された。

否定的意見の因子分析

イレズミに対する否定的な意見の心理的因子を抽出するため，否定的意見 20 項目に対して探索的因子分析を行った。因子の推定方法は主因子法で，回転はプロマックス法であった。因子数は，1 より大きい固有値の数によって決定された。その結果，3 つの因子が抽出された(表 1)。第一の因子は,「イレズミのはいっている体を見て汚いと思う」「イレズミは人を遠ざけるためのものだと思う」「イレズミのはいっている人を見るのが怖い」などに代表されるため,「(イレズミをしている)人物への嫌悪」と命名された(寄与率 52.82%)。第二の因子は,「プールなど肌を露出する所へ行きづらくなると思う」「消せなくて後悔すると思う」「恋愛や結婚に悪い影響が出ると思う」に代表されるもので, イレズミが入っていることで生じる「社会的不利益」と命名された(寄与率 8.33%)。第 3 の因子は,「思い通りの仕上がりにならなさそうだと思う」「依存して止まらなくなりそうに思う」「施術の安全性に不安を感じる」に代表されるもので，イレズミを入れることによって生じる「リスク」と命名された(寄与率 5.26%)。

否定的意見の因子と抵抗感との関連

イレズミに対する 3 つの否定的因子(人物への嫌悪，社会的不利益，リスク)が，抵抗感にどのように関連しているのかを調べた。そのために，抵抗感の得点を目的変数，因子得点を説明変数とした重回帰分析を行った。この分析はイレズミを入れる(と想定されている)人物ごとに行われ，いずれの場合も回帰式は有意であった(自分 $F(3, 196) = 23.599$, $p < .0001$, $R^2 = .265$; 友人日本人 $F(3, 196) = 82.251$, $p < .0001$, $R^2 = .557$; 友人外国人 $F(3, 196) = 71.034$, $p < .0001$, $R^2 = .521$; 他人日本人 $F(3, 196) = 58.147$, $p < .0001$, $R^2 = .471$; 他人外国人, $F(3, 196) = 44.324$, $p < .0001$, $R^2 = .404$)。

自分がイレズミを入れることへの抵抗感には,「社会的不利益」因子のみが有意に寄与した(図 1)。友人の日本人，友人の外国人，他人の日本人，他人の外国人がイレズミを入れる事への抵抗感には,「人物への嫌悪」が有意に寄与した。さらに，よく知らない外国人がイレズミを入れることへの抵抗感には,「社会的不利益」は負の方向に寄与し,「リスク」が正の方向に寄与した。

抵抗感における人物・年代・知人の効果

イレズミへの抵抗感の強さを，イレズミを入れる人物ごと，かつ回答者の年代ごとに算出した(図 2)。抵抗感の強さを目的変数，イレズミを入れる人物の種類，および回答者の年代を説明変数とした二要因の分散分析を行った結果，イレズミを入れる人物の効果および年代の効果は有意であった(それぞれ $F(4, 980) = 45.258$,

表 1 否定的意見の因子分析

項目	人物への嫌悪	社会的不利益	リスク
イレズミのはいっている体を見て汚いと思う	.921	−.157	.032
イレズミは人を遠ざけるためのものだと思う	.742	−.057	.107
イレズミのはいっている人を見るのが怖い	.695	.082	−.015
反社会的な人物のようだと思う	.643	.265	.001
イレズミの似合う人なんてほとんどいないと思う	.631	.037	.115
見る人を不快にさせるから良くないと思う	.624	.189	.133
イレズミはかっこわるいと思う	.612	.174	.068
イレズミをいれている人は軽薄な人だと思う	.572	−.047	.349
プールなど肌を露出する所へ行きづらくなると思う	.029	.919	−.251
施術が痛そうだと思う	−.275	.766	.205
消せなくて後悔すると思う	.025	.724	.123
恋愛や結婚に悪い影響が出ると思う	.267	.565	.121
他人から差別的な目で見られると思う	.369	.564	−.073
まともな仕事に就けなくなると思う	.292	.466	.154
イレズミを入れるメリットが解らない	.323	.451	.084
イレズミをいれている人の家族が嫌がると思う	.189	.449	.298
思い通りの仕上がりにならなさそうだと思う	.088	−.004	.734
依存して止まらなくなりそうに思う	.250	−.080	.496
施術の安全性に不安を感じる	.020	.315	.495
病気になりそうだと思う	.203	.076	.451

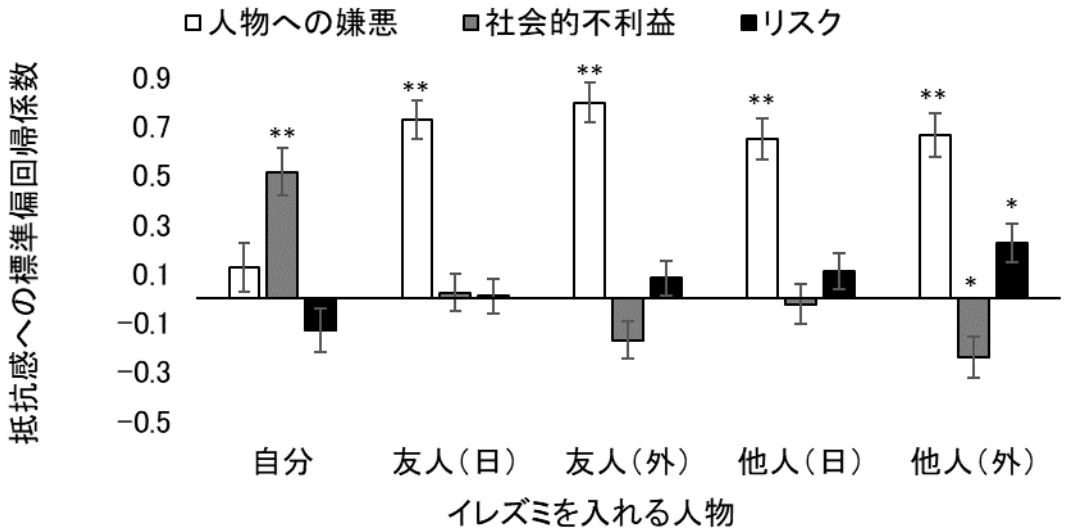

図 1 抵抗感に対する否定的因子の寄与。エラーバーは標準誤差。括弧内の「日」は日本人，「外」は外国人を意味する。（標準偏回帰係数の有意性，$^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$）

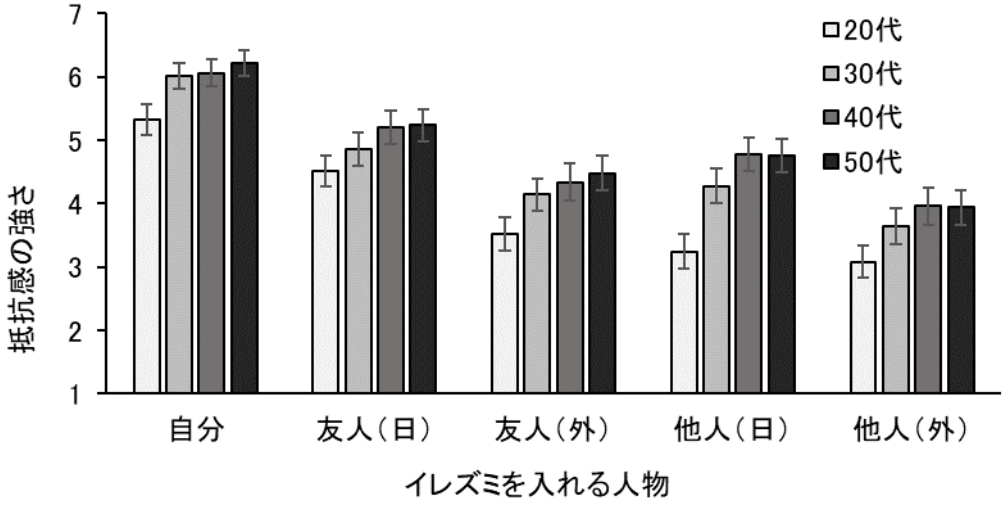

図 2 イレズミを入れる人物ごとの抵抗感。エラーバーは標準誤差。括弧内の「日」は日本人,「外」は外国人を意味する。

$p < .0001$; $F(3, 980) = 15.241$, $p < .0001$)。しかしながら，両者の交互作用は有意ではなかった($F(12, 980) = 0.404$, $p = .962$)。イレズミの人物の効果を多重比較したところ抵抗感は，自分＞日本人の友人＞外国人の友人＝日本人の他人＞外国人の他人，の順になっていた(Holm 法，$\alpha = .05$)。また，年代の効果を多重比較(Holm 法，$\alpha = .05$)したところ，20 代の抵抗感はほかの年代のそれに比べて低かった。

各人物の抵抗感の強さを目的変数，イレズミを入れた知人の有無への回答を説明変数とした一要因分散分析を行った。その結果，自分，友人の日本人，友人の外国人，他人の日本人，他人の外国人いずれの抵抗感においても，説明変数の効果は有意で(それぞれ, $F(3, 196) = 3.571$, $p = .015$; $F(3, 196) = 13.961$, $p < .001$; $F(3, 196) = 21.071$, $p < .001$; $F(3, 196) = 12.410$, $p < .001$; $F(3, 196) = 13.848$, $p < .001$)，イレズミの知人がいる場合はいない場合に比べて抵抗が低かった(Holm 法，$\alpha = .05$)。例えば，他人の日本人がイレズミを入れる事への抵抗感は，イレズミの知人がいる場合は 3.263($SD = 1.962$)で，いない場合は 4.851($SD = 1.791$)，わからない場合は 5.150 ($SD = 1.461$)であった。

イレズミ人口

「あなたはイレズミを入れていますか」という質問に対する回答は，「はい」が 2 名(男女各 1 名)，「いいえ」が 196 名，「答えられない」が 2 名(男女各 1 名)であった。「あなたの知人でイレズミを入れている人はいますか」という質問に対する回答は，「はい」が 76 名(男性回答者 35 名，女性回答者 41 名)，「いいえ」が 101 名(男性回答者 48 名，女性回答者 53 名)，「わからない」が 20 名(男性回答者 16 名，女性回答者 4 名)，「答えられない」が 3 名(男性回答者 1 名，女性回答者 3 名)であった。なお，「あなたは外国人の友人がいますか」に対する回答に対しては，「はい」が 55 名，「いいえ」が 140 名，「答えられない」が 5 名であった。

考　察

本研究の目的は，イレズミに関する否定的な意見を整理し，自他のイレズミへの抵抗感に結びついている要因を明らかにすることであった。調査の結果，イレズミに関する否定的な意見を構成する主要な因子は「人物への嫌悪」「社会的不利益」「リスク」の 3 因子であることが明らかになった。さらに，自分のイレズミに関しては「社会的不利益」が抵抗感につながっており，(友人を含めた)他者のイレズミに関しては「人物への嫌悪」が特に抵抗感につながっていることが示された。

先行研究に見られたいくつかの傾向は，本研究の結果においても追認されている。例えば，日本在住者である本研究の回答者は自分のイレズミには強い抵抗を感じており，実際にイレ

ズミを入れている者は高々数パーセント程度であった(関東弁護士連合会, 2014; 鈴木・大久保, 2018)。また，他者との関係が自分と遠くなるほど抵抗感は薄れる傾向(関東弁護士連合会, 2017)や, 若い年代ではイレズミへの抵抗感が低まる傾向(藤岡, 2017; Tews et al., 2020)，イレズミを入れた知人がいれば，イレズミに対してより寛容になるという傾向(Dickson, Dukes, Smith, & Strapko, 2019; 鈴木・大久保, 2018)なども確認された。これらの点において，本研究のデータは先行研究の結果に整合していると言える。

イレズミ研究における本研究の貢献の一つは，イレズミへの否定的意見を構成する 3 つの因子を明らかにしたことである。確かに，岡林他(2016)はイレズミに対する印象を因子分析していた。しかし彼らが見出した因子は「ポジティブ」と「ネガティブ」の 2 因子であり，ネガティブな意見の中にどのような種類が存在するかまではよくわかっていなかった。彼らが用いた 10 項目にはネガティブ意見とポジティブ意見が偏りなく含まれていたため，先述の 2 因子に分けることが妥当だったのであろう。一方本研究が用いた項目には，広く集められた否定的意見のみの 20 項目が使われており，ネガティブの中にも「人物への嫌悪」「社会的不利益」「リスク」の 3 因子があることを示すことができた。本研究の知見は岡林他(2016)と相反するものではなく，彼らの知見を発展させたものである。

さらに本研究は，イレズミを入れる人物が自分の場合と他者の場合とでは，抵抗感に影響する心理的因子が異なるということも明らかにした。自分がイレズミを入れることへの抵抗感と強く関係する因子は，社会的不利益であった。一方，他者がイレズミを入れることへの抵抗感と強く関係する因子は，人物への嫌悪であった。つまり，自分がイレズミを入れるときの意見としては，あくまで不利益を避けたいのであって，反社会的人物のようになりたくないといった意見はあまり影響しないと言える。また，他者がイレズミを入れるときの意見としては，あくまでそういう人を嫌だなと思うのであって，損をするからやめるべきだといった意見はあまり影響しないのである。このような違いは従来の研究ではあいまいなまま過誤されてきた点である。しかしこのような違いが明らかになった以上は，今後の研究においてイレズミに対する印象を問うときには，誰のイレズミか，を明確にすることが必要だと言える。

自分とかかわりのない外国人のイレズミに対する重回帰分析では，ほかの場合とは異なる特徴がみられた。結果では，自分とかかわりのない外国人がイレズミを入れる場合のみ，「社会的不利益」が負の影響を，「リスク」が正の影響を抵抗感に与えていた。日本人には，日本人のイレズミを伝統文化とは認めない一方で(関東弁護士連合会, 2014)，外国人のイレズミに関しては宗教や文化的理由があるのだろうと理解を示そうとする傾向がある(藤岡, 2017)。そのような，外国人の文化に関する何らかの想像が，「社会的不利益」と「リスク」に反映されたと推察される。しかしこのような特徴は外国人が友人である場合にはみられなかった。その理由は明らかではないが，おそらく，自分と似た態度や文化の外国人を友人として想像したためと推察される。本研究の回答者のうち実際に外国人の友人がいた者は全体の 27.5%であり，70%は「いるとしたら」との想定で回答している。その時，回答者が自分と同じ価値観の人物を友人として想像したために，外国人であることの意味が薄れた可能性がある。

本研究では,「人物への嫌悪」を構成するさらに下位の要因までは明らかにされなかったが，イレズミが連想させる反社会的行動への恐怖心は一つの要因になっているであろう。本研究の「人物への嫌悪」因子の中にも「イレズミのはいっている人を見るのが怖い」「反社会的な人物のようだと思う」といった項目が含まれていた。また，先行研究でも人々はイレズミをアウトローと結びつけて考えがちであると示されている(e.g., 関東弁護士連合会, 2014)。イレズミの人物から実際に恫喝などの危害を加えられたことのある日本人は 4.5%しかいないと言われてはいるが(関東弁護士連合会, 2014)，イレズミは実際の犯罪や逸脱行動と関連する傾向もあるらしく(Deschesnes, Finès, & Demers, 2006; Guéguen, 2013b; King & Vidourek, 2019; Lane, Williams & Foster, 2020; Liao, Chang, & Su, 2014; Tews & Stafford, 2019; Swami et al., 2015)，人々がイレズミを反社会性と結びつけて考えることは不自然ではない。そして，そういった反社会性への恐怖が「人物への嫌悪」を構成する一部

になっていると考えられるのである。

しかしながら,「人物への嫌悪」因子には，恐怖心以外の成分も含まれていると推察される。本研究で抽出された「人物への嫌悪」因子の中には「イレズミのはいっている体を見て汚いと思う」「イレズミは人を遠ざけるためのものだと思う」「イレズミの似合う人なんてほとんどいないと思う」といった恐怖心以外を指すような項目も含まれていた。「イレズミのはいっている体を見て汚いと思う」という意見は，イレズミを蔑むような感情かもしれない。「イレズミは人を遠ざけるためのものだと思う」という意見は，接近を阻害されることへの困惑かもしれない。さらに,「イレズミの似合う人なんてほとんどいないと思う」という意見は，そんなことやめておけばよいのにという親切心かもしれない。これらはスペキュレーションでしかないが，本研究の「人物への嫌悪」因子はさらに下位の複数の感情から構成されている可能性が高い。今後，この因子の下位構造をより詳しく調べ，嫌悪の感情を整理することが，イレズミへの偏見を取り除く鍵になると予想される。

最後に，今後の研究につながる可能性がありながらも本研究で十分に議論されなかったいくつかの点を挙げておく。第一に，本研究では，人物への嫌悪が形成される要因として文化や歴史的背景についてはほとんど検討できていない。巨視的には，文化や歴史がイレズミへの否定的意見に影響していることは明らかである(山本, 2016)。実際，本研究においても，自分とかかわりのない外国人のイレズミに対しては特徴的な結果が示されている。今後，文化や歴史的背景の視点を含む研究により，イレズミをした人物への嫌悪の理由をさらに詳しく考察することが可能になるであろう。

第二に,「あなたの知人でイレズミを入れている人はいますか」という質問に対し，多くのの回答者が「わからない」ではなく「いいえ」と回答した点も興味深い。現実的には，すべての知人にイレズミの有無を尋ねたり服の下を調べたりしたとは考え難く，実際は「わからない」はずである。それにもかかわらずほとんどの回答者は「いいえ」と答えているのである。これは，人々がイレズミに関して，自分と他者との合意性を過大視している可能性を示しており，日本人のイレズミ観を研究する上での示唆を与えるものであろう。

本研究は，イレズミに対する否定的意見を整理し，抵抗感につながる要因を明らかにした。今後の研究ではさらに,「人物への嫌悪」がどのような要因で構成されているのか，あるいはどういった理由で生起するのかが詳しく調べられるべきであろう。それらの研究は，イレズミに対する人々の態度を理解し，偏見や差別にまつわる問題を解決する助けになると考えられる。

注

2　本稿では，入れ墨，刺青，タトゥーなど，英語で tattoo と表されるものすべてを含めてイレズミと表記した。

利益相反

本研究には利益相反は想定されません。

引用文献

Atik, D., & Yıldırım, C. (2014). Motivations behind acquiring tattoos and feelings of regret: Highlights from an Eastern Mediterranean context. *Journal of Consumer Behavior*, *13*, 212–223. https://doi.org/10.1002/cb.1480

Atli, A., Akkaya, M., & Şad, S. N. (2021). Tattooing: A popular way of self-expression among university students. *Current Psychology*, Advance online publication. https://doi.org/10.1007/S12144-021-01389-0

Ball, J., & Elsner, R. (2019). Tattoos increase self-esteem among college students. *College Student Journal*, 53, 293–300.

Deschesnes, M., Finès, P., & Demers, S. (2006). Are tattooing and body piercing indicators of risk-taking behaviours among high school students? *Journal of Adolescence*, *29*, 379–393. https://doi.org/10.1016/j.adolescence.2005.06.001

Dickson, L., Dukes, R., Smith, H., & Strapko, N. (2019). Stigma of ink: Tattoo attitudes among college students. *The Social Science Journal*, *51*, 268–276. https://doi.org/10.1016/J.SOSCIJ.2014. 02.005

Eriksson, H., Christiansen, M., Holmgren, J., Engström, A., & Salzmann-Erikson, M. (2014).

Nursing under the skin: a netnographic study of metaphors and meanings in nursing tattoos. *Nursing Inquiry*, *21*, 318–326. https://doi.org/10.1111/nin.12061

Foltz, K. A. (2014). The Millennial's perception of tattoos: Self expression or business faux pas? *College Student Journal*, *48*, 589–602.

French, M. T., Mortensen, K., & Timming, A. R. (2018). Are tattoos associated with employment and wage discrimination? Analyzing the relationships between body art and labor market outcomes. *Human Relations*, *72*, 962–987, https://doi.org/10.1177/0018726718782597

藤岡美香子 (2017). 訪日外国人旅行者の快適な日本体験のための環境整備に関する一考察 ――入れ墨(タトゥー)がある人の公衆浴場利用の視点から―― 東海大学経営学部紀要 *5*, 11–22.

Guéguen, N. (2013a). Effects of a Tattoo on Men's Behavior and Attitudes Towards Women: An Experimental Field Study. *Archives of Sexual Behavior*, *42*, 1517–1524. https://doi.org/10.1007/S10508-013-0104-2

Guéguen, N. (2013b). Tattoo, piercing, and adolescent tobacco consumption. *International Journal of Adolescent Medicine and Health*, *25*(1), 87–89. https://doi.org/10.1515/IJAMH-2013-0012

Henle, C. A., Shore, T. H., Murphy, K. R., & Marshall, A. D. (2022). Visible Tattoos as a Source of Employment Discrimination Among Female Applicants for a Supervisory Position. *Journal of Business and Psychology*, 37, 107–125. https://doi.org/10.1007/S10869-021-09731-W

Hill, B. M., Ogletree, S. M., & McCrary, K. M. (2016). Body modifications in college students: Considering gender, self-esteem, body appreciation, and reasons for tattoos. *College Student Journal*, *50*, 246–252.

Hiramoto, M. (2014). "Island girl from the island": Tattooed symbols and personal identities in contemporary Hawai'i. *Journal of Asian Pacific Communication*, *24*, 173–195. https://doi.org/10.1075/JAPC.24.2.02HIR

Jackson, C. (2019). More Americans have tattoos today than seven years ago. https://www.ipsos.com/en-us/news-polls/more-americans-have-tattoos-today

関東弁護士連合会 (2014). 自己決定権と現代社会: イレズミ規制のあり方をめぐって: 平成 26 年度関東弁護士会連合会シンポジウム 関東弁護士会連合会

King, K. A., & Vidourek, R. A. (2019). Getting inked: Tattoo and risky behavioral involvement among university students. *The Social Science Journal*, 50, 540–546. https://doi.org/10.1016/j.soscij.2013.09.009

Lane, D. C., Williams, K. R., & Foster, J. (2020). Businesses, places, and homicide: A preliminary empirical examination. *Deviant Behavior*, *42*, 1329–1344. https://doi.org/10.1080/01639625.2020.1743137

Liao, P.-A., Chang, H.-H., & Su, Y.-J. (2014). Is tattooing a risk factor for adolescents' criminal behavior? Empirical evidence from an administrative data set of juvenile detainees in Taiwan. *Risk Analysis*, *34*, 2080–2088. https://doi.org/10.1111/risa.12232

岡林誠士・工藤雅人・熊谷伸子 (2018). 女子大学生における他者の身体装飾への意識 ――タトゥーとピアスを中心として―― 繊維製品消費科学, *59*(7), 542–550. https://doi.org/10.11419/SENSHOSHI.59.7_542

Owen, D. C., Armstrong, M. L., Koch, J. R., & Roberts, A. E. (2013). College students with body art: Well-being or high-risk behavior? *Journal of Psychosocial Nursing and Mental Health Services*, *51*(10), 20–28. https://doi.org/10.3928/02793695-20130731-03

Skoda, K., Oswald, F., Brown, K., Hesse, C., & Pedersen, C. L. (2020). Showing skin: Tattoo visibility status, egalitarianism, and personality are predictors of sexual openness among women. *Sexuality & Culture*, *24*, 1935–1956. https://doi.org/10.1007/S12119-020-09729-1

Swami, V., Gaughan, H., Tran, U. S., Kuhlmann, T., Stieger, S., & Voracek, M. (2015). Are tattooed adults really more aggressive and rebellious than those without tattoos? *Body Image*, *15*, 149–152. https://doi.org/10.1016/j.bodyim.2015.09.001

Swami, V., Tran, U. S., Kuhlmann, T., Stieger, S., Gaughan, H., & Voracek, M. (2016). More similar than different: Tattooed adults are only slightly more impulsive and willing to take risks than non-tattooed adults. *Personality and Individual Differences*, *88*, 40–44. https://doi.org/10.1016/j.paid.2015.08.054

鈴木公啓・大久保智生 (2018). いれずみ(タトゥー・彫り物)の経験の実態および経験者の特徴　対人社会心理学研究, *18*, 27–34. https://doi.org/10.18910/70538

Tews, M. J., & Stafford, K. (2019). The relationship between tattoos and employee workplace deviance. *Journal of Hospitality & Tourism Research*, *43*, 1025–1043. https://doi.org/10.1177/1096348019848482

Tews, M. J., & Stafford, K. (2020). Tattoos and unfavorable treatment among employees in the hospitality industry. *International Journal of Contemporary Hospitality Management*, *32*, 1925–1940. https://doi.org/10.1108/IJCHM-08-2019-0712

Tews, M. J., Stafford, K., & Jolly, P. M. (2020). An unintended consequence? Examining the relationship between visible tattoos and unwanted sexual attention. *Journal of Management & Organization*, *26*, 152–167. https://doi.org/10.1017/jmo.2019.74

Tews, M. J., Stafford, K., & Kudler, E. P. (2020). The influence of tattoo content on perceptions of employment suitability across the generational divide. *Journal of Personnel Psychology*, *19*, 4–13. https://doi.org/10.1027/1866-5888/A000234

Timming, A. R., Nickson, D., Re, D., & Perrett, D. (2017). What do you think of my ink? Assessing the effects of body art on employment chances. *Human Resource Management*, *56*, 133–149. https://doi.org/10.1002/hrm.21770

Timming, A. R. (2014). Visible tattoos in the service sector: a new challenge to recruitment and selection. *Work, Employment and Society*, *29*, 60–78. https://doi.org/10.1177/0950017014528402

山本芳美 (2016). イレズミと日本人. 平凡社.

Zestcott, C. A., Tompkins, T. L., Williams, M. K., Livesay, K., & Chan, K. L. (2017). What do you think about ink? An examination of implicit and explicit attitudes toward tattooed individuals. *The Journal of Social Psychology*, *158*, 7–22. https://doi.org/10.1080/00224545.2017.1297286

イレズミ(tattoo)の人口が増えてきている国々においてさえ，自分や他者のイレズミに対する抵抗感は依然として存在している。人々がイレズミに対してさまざまな否定的意見を持っているという点で，同じことが日本にも当てはまる。しかしながら，どのような意見がイレズミへの抵抗感と結びつく傾向があるのかはよくわかっていない。本研究では，イレズミに関する否定的な意見について因子分析を行い，イレズミの人物への嫌悪，社会的不利益，リスクの 3 つの因子を得た。次に，3 因子で抵抗感の強さを説明する重回帰分析を行った。その結果，回答者本人がイレズミを入れる事を想定した場合には社会的不利益因子が重要で，他人がイレズミを入れることを想定した場合には人物への嫌悪因子が重要であった。これらの知見は、自己と他者のイレズミへの抵抗感につながる因子が明らかに異なるということを示唆している。

キーワード：イレズミ・抵抗感・嫌悪・不利益・リスク

― 2021. 11. 30 受稿，2022. 2. 2 受理 ―